猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:205部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区:125部
市民センター:90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

集落柵の弱点と今後の課題

田植え後のシカ食害 ①

古来から、農民は、シカなどの害獣の対応に追われてきました。古来においては害獣による農作物被害は死活問題だったのです。その苦労は、江戸時代に造られた長大な「シシ垣」からでも窺われます。江戸時代の「シシ垣」と現代の獣害対策は、その目的や概念が、現代に通ずるところがあり、形を変えて現代に受け継がれています。

集落柵の現状

現在、設置されている柵の種類を大きく分類すると「物理柵」と「心理柵」に分けることができます。

物理柵とは、その名の通り物理的に、野生鳥獣の侵入をコントロールする柵のことです。

心理柵とは、心理を利用した防護柵のことで、電気柵が一般的です。それを、また個別柵、グループ柵、集落柵に分類しています。

◆個別柵
農地の管理者個人が、農地を柵で囲って管理するもの。

◆グループ柵
複数の個人が、隣接した農地をひとまとめに囲って管理するもの。

◆集落柵
集落・農地全体を防護柵で囲み、イノシシなど野生獣から守る柵で、現代版「シシ垣」として全国に広く普及しています。

集落柵は、本来の野生獣の生息地となる場所から農地を含む集落全体を囲うものですが、単なる物理的な障壁ではなく、人と野生動物が棲み分けを図るための拠点としての役目もあるのです。

しかし、集落柵には水路や交通量の多い道路など、どうしても完全に閉鎖できない場所（開口部）が出きてしまうという先天的弱点があります。

この開口部が野生獣の通路となり、周辺の農地に被害が集中することが問題となっています。

完全を期して設置した集落柵でも、弱点が多く、十分な機能を発揮していません。

名張市Y地区でも、開口部から侵入したシカによる水稲の食害や踏み倒しが毎年発生していて、その被害は年を追う毎に大きくなっています。（写真①参照）

開口部問題は、設置前の集落全体の協議の中で、合意形成がなされていたかが問題ですが、今となっては「後の祭り」。

開口部からの侵入をどのようにして防止するかということが喫緊の課題となっています。

開口部からの侵入防護が全国的に問題となっていますが、今、全国的に広く普及しているのが、シカなど偶蹄類は、足の構造上グレーチングなど網状の上を歩行するのを嫌がるということから、侵入防止用の「テキサスゲートグレーチング」（写真②③参照）の設置です。

しかし、設置にあたっては、道路管理者との協議が必要となり、工事コストは、補助金がなければ一集落で賄えるものではなく、公的な支援が必要になり「一朝一夕」に解決できるものではありませんが、開口部の防護は是非必要。

開口部からの侵入を一時的に防護する方法として、シカでは田植え直後の被害多発時、イノシシでは出穂から登熟期の被害多い時期に、一時的に開口部に忌避剤や威嚇装置での対策行っています。しかし、これは一時的な対策で根本的な解決策ではありません。

「自分の畑は自分で守る」が獣害対策の基本ですが、高齢化により防護柵の設置や管理が困難な多くの農家は、被害を受けながら半ば諦めの気持ちで営農を続けています。

この諦めが問題で、この諦めが耕作放棄や離農の原因に繋がり中山間地域の不活性化の原因になっています。

農業に携わる一人ひとりが「自分の畑は自分で守る」の、気概を持ち鳥獣害対策は、自らの対策だと考え行動しなければ鳥獣害対策の進展はありません。

柵の設置については、設置方法を誤ったり、維持・管理が不適切であったりすると、十分な効果は得られず、かえって逆効果になる恐れもあるので、設置に当たっては細心の注意が必要です。

完全を期して設置した集落柵でも、先天的な弱点が多く、十分な機能を発揮していなく、名張市Y地区でも、２０１４年の設置以来8年近くなりますが、被害が減るどころか増加している状況にあります。

集落柵は、定期的に点検を行い、破損箇所を補修すると共に、乗り越えや潜り込みなど侵入箇所を見つけた場合は、柵の機能を向上させるために改良を加え、機能の維持を図ることが重要です。

囲み過ぎた所はありませんか。

大規模に囲まれシカなどが奥山側に帰れない「囲み過ぎ」になっていないか調査し改善することも重要になります。

また、水路に関しては写真④のように、増水時には水路部分の柵が外れるような臨機応変な対策があると思います。

野生獣侵入の「防波堤」となるべき中山間地域は人口の減少や高齢化の進展が著しく、野生獣を奥山へ追い返す圧力が弱まっていて、獣害と向きあって農業を継続していくことが困難になっています。

今後の獣害対策は、集落柵の開口部の改善を始め、野生動物が目当てにする餌を極力少なくするよう荒廃農地の整備や、集落環境整備などを集落ぐるみの取り組みで、集落柵の機能の充実を図ることが喫緊の課題となります。

更に、集落柵の効果を高めるためには、従来の集落単位での設置ではなく、隣接する集落が連続して柵を設置、維持管理することが望まれます。

中山間地域における農業は、食料生産と多面的機能の維持・発揮の両面で重要な役割を担っていて、我が国農業の中で重要な位置を占めています。しかし、今や、中山間地域においては、高齢化や人口減少が進展し、地域コミュニティ活動などにも影響が出ています。

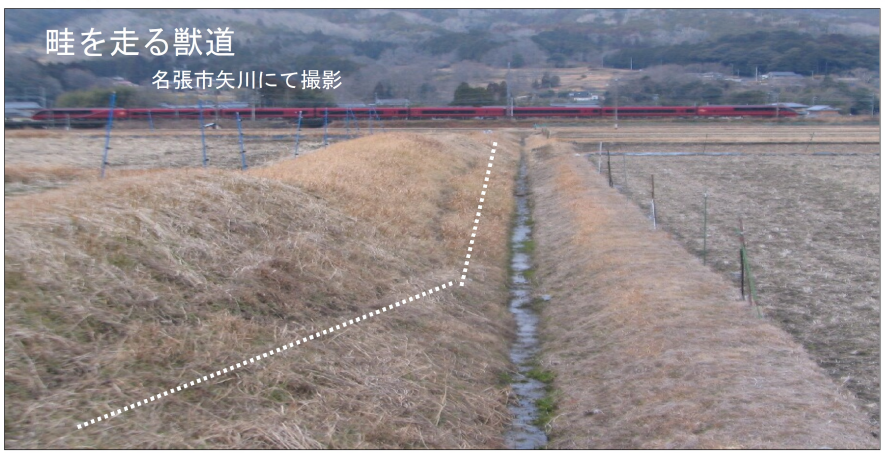
野生動物の本来の生息地であった森林の環境改善など野生鳥獣との棲み分けを図り、人と野生動物が共存する魅力ある農村の姿を次世代に継承することこそが、現代を生きる私たちに課せられた使命です。

「“道路面にグレーチング”」 ②
兵庫県北播磨県民局HPより引用

「“開口部を間伐材で防護”」 ③
兵庫県北播磨県民局HPより引用

水路に「“すだれ状の柵”」 ④
兵庫県北播磨県民局HPより引用

耕作放棄地を横断する獣道
名張市矢川にて撮影


畦を走る獣道
名張市矢川にて撮影

青山B群＝名張C群 名張市滝之原に集中

令和2年7月頃から、滝之原や隣接する「すずらん台」に20数頭のサルが出没。この時期に青山群は分裂したとみられています。

青山群は元来25～35頭ほどの群れであったのが、青山A群（約10頭）。青山B群＝名張C（20頭前後）と呼称されています。青山B群の出没状況は滝之原に連日で居付き状態。人慣れが進み農作物被害や生活環境被害が発生しています。

「“滝之原の民家の屋根にサルの群れ”」
写真提供 名張市農林資源室　加工して掲載

滝之原と隣接するすずらん台地区では、スクールゾーンでの出没が多く学校関係者や”保護者が、児童の登下校時の人身被害が心配されています。

名張市に存在するサル群は、名張市南東部29キロ平米を遊動域とする個体数約21頭（令和1年度調査）の「名張A群」と、名張市西南部～宇陀市室生45平方キロが遊動域の個体数約10頭（令和1年度調査）の「名張B群」2群が存在していましたが、令和2年度からは滝之原地区周辺を遊動域とする青山B群加わっています。

青山B群においては、既存のLSB発信器によるテレメトリー調査に加え、今年1月よりGPSによるモニタリング調査を導入しています。

～R4年度名張市鳥獣被害防止計画

『サルの被害傾向』

名張A群

『“名張A群は行動域内の集落での農林業被害に加え、住宅地においても住民への威嚇や道路に居座るといった人慣れが深刻化している。平成27、28年度に個体調整を実施し、群れの頭数を半減させたが、今後も行動調査を実施した上で、自然の食物のみで生存できる個体数に調整していく必要がある。”』

名張B群

『“名張B群は、行動域内では農作物被害を発生させており、平成27年度に個体数調整を実施し、頭数を8割減少させた。しかし、平成30年以降、発信機の電池切れによって群れの消息が不明となっており、早急に発信機を装着し所在を掴む必要がある。”』

◇R1年1月、B群個体捕獲、発信器を再装着しテレメトリーによる追跡調査を再開しています。

『サル被害軽減目標』

名張A群

『“平成27、28年度に実施した個体数調整により、群の頭数が約半数となったが徐々に個体数が増加しているため、再び大量捕獲を実施する。また、捕獲により頭数が減少すれば追い払いの効果も上がることが期待されることから、被害の低減は1割程度を見込む。”』

サルによる大根食害

名張B群

『“平成27年度に奈良県宇陀市と合同で実施した個体数調整により、群の頭数が2割程度となったが、平成30年度から群れの消息が掴めておらず目撃情報では頭数は増加しているため、発信機装着後に再び個体数調整を実施する。また、捕獲により頭数が減少すれば追い払いの効果も上がることが期待されることから、被害の低減は1割程度を見込む。”』

令和4年度個体調査は、名張全ての群れを対象に現在実施中です。

名張B群の追跡調査は、現在では宇陀市が担当しています。

『シカの被害傾向』

『“中山間地での被害の増加に伴い、これらの地域で防護柵の設置が進んできたことにより、平野部や防護柵の設置が進んでいない小規模農地への被害が拡大傾向にある。

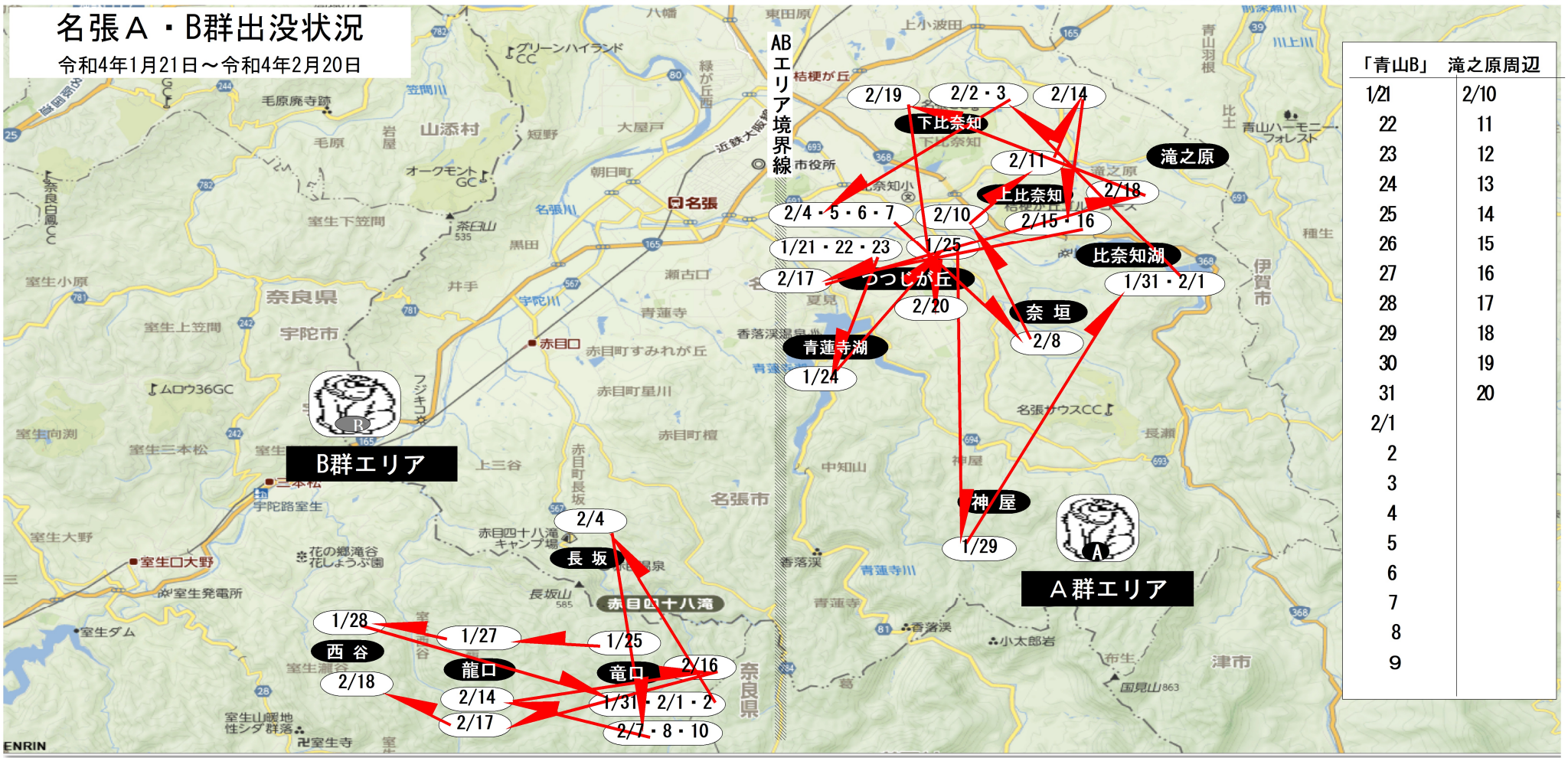
また、防護柵の網に絡まる等の報告も数多く寄せられている。被害の傾向としては、田植え直後の早苗の食害、植樹直後の低木の皮剥ぎ、ぶどうの果実の食害も報告されている。また、エサの少ない冬場には農地や畦畔の雑草を求め集落内を踏み荒らしている。また、最近では、市街地への出没も見られ、自動車と衝突するなどの生活環境被害も起こっている。”』

防護ネットに絡まったシカ
名張市矢川にて撮影

『シカ被害軽減目標』

『“これまで被害防止施設の整備や有害駆除の実施により、3割の被害低減を目標としてきた。被害防止施設は中山間地域には概ね整備できたが、今後平野部への被害が予想されるため、整備を進める。また、現在の主となる捕獲者の高齢化が懸念されるが、新たな捕獲者の育成により、継続的な捕獲を目指すことで、平成30年度比から1割の被害低減を見込む。”』

◇参考文献
名張市鳥獣被害防止計画



「青山B」	滝之原周辺
1/21	2/10
22	11
23	12
24	13
25	14
26	15
27	16
28	17
29	18
30	19
31	20
2/1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

チョット一服

『犬、猫などの殺処分について』

２年間に及ぶコロナ禍の中で、癒しを求めて犬や猫等ペットを飼う人が、日本でも、世界中でも、増えています。私たち夫婦も、以前犬を飼っていて、楽しかったあの頃を時々思い出すことがあります。最近、動物の番組をテレビで見るのが好きでよく見ています。あの愛らしい犬や猫を見ていると疲れが取れるような気がします。しかし今、日本や、世界各国で、新型コロナウイルス感染拡大の中で感染の危険性や高齢化による飼育困難を理由にペットたちが、日本でも年間数万頭殺処分されています。殺処分が、ゼロにならない原因の一つとして、「引き取り数の削減」を挙げられますが、実際には、無責任な飼い主による遺棄や、多頭飼育で多くの野良犬や野良猫が生まれている現実があります。そのことによって、動物愛護センターなどに引き取ってもらう、また保健所で殺処分される状況があります。犬や猫などのペットの、不妊去勢手術が行われていなければ、繁殖により、さらに飼い主のいない犬や猫などペットが増え、殺処分へと繋がる可能性が高くなります。こんな不幸な世の中にしないために、飼い主は、動物の命に対してしっかりとした自覚と責任を負わなければいけないと思います。

文：田北　利治